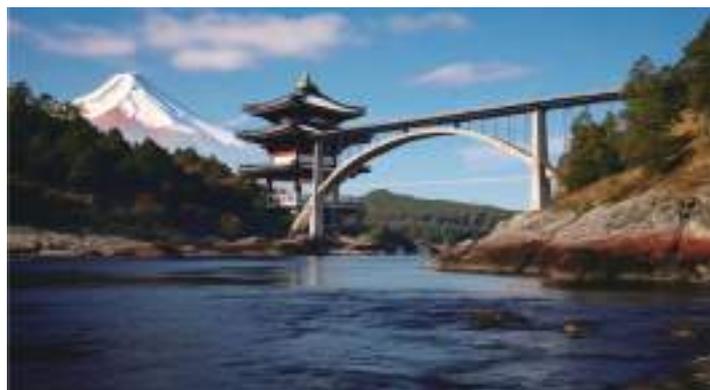


Björk ビヨルク

Swedish Center Foundation

vol. 160



Special Interview



CONTENTS

ペールエリック・ヘーグベリ大使年頭メッセージ

寄稿：ジャパン・ブリッジ・スカンジナビア

SCF レポート：Swea Fest 北海道” Kräftskiva” AND MORE

ペールエリック・ヘーグベリ 駐日スウェーデン大使
年頭メッセージ

*The new year message from
Mr. Pereric Högberg, Ambassador*



Dear friends in Japan,

This past year has been filled with important activities for the embassy, in the effort of further strengthening the ties between Sweden and Japan. Due to a much needed renovation project, a lot has changed when it comes to the daily operations of the embassy, following the move to a temporary office space. We are now located in Ark Mori building, not too far from our own embassy building. We look forward to moving back to a new House of Sweden in 2026. I'm confident it will become a landmark in Tokyo.

In March, I had the pleasure to participate in Vasaloppet Japan 2023 in Asahikawa, and the day was filled with great sportsmanship and friendship. Vasaloppet is a proof of the strong relationship between Hokkaido and Sweden tied to historic roots.

In the field of culture, we held a Jazz Festival in May and has promoted children's literature throughout this fall. In April the political team participated in a LGBTQ+ pride parade in Tokyo, and in May a youth democracy festival.

In October, we were finally able to inaugurate the new honorary consulate in Sapporo, Hokkaido. I was very happy to welcome Mr Nakano Shogo, CEO of the Swedish company De Laval, as our honorary consul. We have a new honorary consul in Kobe. Mr Wada Tomoki is the CEO of Kinki and has since long established the relationship between Sweden and Japan.

We continue with preparations for EXPO 2025. Sweden will participate in a Nordic pavilion together with Denmark, Finland, Norway, and Iceland. EXPO 2025 presents a unique opportunity for visitors to further explore Nordic culture, in addition to cultures from all over the world.

I would like to end my letter with a Haiku. Since 1895, a Swedish New Year's Eve tradition is to visit Skansen in Stockholm to hear the famous poem 'Ring out, wild bells' performed at the same time as fireworks light up the sky at midnight. Nowadays broadcasted on national tv, different hosts repeat the famous words "Ring klocka ring" as the church bells ring in the new day, and year, from the 31st of December to the 1st of January. This is the source of inspiration for the Haiku.

*Ring klocka ring in
Bister natt blir varm av eld
Ett nytt år nalkas*

Happy New Year!

Pereric Högberg

親愛なる日本、そして北海道の皆さまへ

旧年は日本とスウェーデンのつながりをより一層深めていくことが目的のひとつであるスウェーデン大使館にとって、非常に重要なできごとが数多くございました。まずは東京にある大使館のリノベーション（改修）工事に伴い、仮事務所に機能を移転したため、大使館の日常業務の多くが様変わりしました。現在私たちは大使館にほど近い、アーク森ビルの中に事務所を構えており、来る2026年のリニューアルオープンに向けて期待に胸を膨らませています。この新しい大使館は、きっと東京のランドマークの一つとなることでしょう。

昨年3月には、旭川市で開催されたスキークロスカントリーの大会、バーサーロペット・ジャパンに参加させていただきました。スウェーデンはもちろん、旭川でも長い歴史をもつバーサーロペットは、日本とスウェーデンが固い絆で結ばれていることの証であり、スポーツマンシップと友情を強く感じる一日となりました。



文化の面においては、5月にはジャズフェスティバルを開催したのははじめ、秋にはスウェーデンの児童文学に関するイベントを開催してその紹介をおこないました。また、4月に東京でおこなわれたLGBTQ+のプライド・パレードに加わったことや、5月の民主主義ユースフェスティバルへ参加したことも外せない出来事です。

10月には、長年の願いであった北海道の札幌市に新たに名誉領事館を開設することができました。今回名誉領事に就任されたスウェーデンの企業・デラバルの日本法人代表の中野省吾氏には改めて歓迎の意を示したいと思います。また、神戸にある名誉領事館でも、永らく日本とスウェーデンの友好に尽力されてきた近畿工業株式会社の代表取締役である和田知樹氏を新たな名誉領事としてお迎えしました。

おわりに、俳句を一句詠みたいと思います。1895年から続くスウェーデンの大晦日の伝統として、夜空を彩る花火と時を同じくしてストックホルムにある野外博物館「スカンセン」で詠まれる有名な“Ring out, wild bells”の詩を聴く、というものがあります。今やそれは国営放送のテレビで中継されるものなのですが、新年を告げる教会の鐘の音とともに“Ring klocka ring”という有名な言葉が繰り返し唱えられます。そんな年末の風景から着想を得ての一句です。

「鐘よ鳴れ 寒の炎に 年明ける」

（俳句訳協力：ダーラナ大学 日本学科 Herbert Jonsson 教授）

新年あけましておめでとうございます。

ペールエリック・ヘーグベリ



Björk Vol.160 目次

ペールエリック・ヘーグベリ駐日スウェーデン大使 年頭メッセージ	2
寄稿：オフェリア・マッセン (ジャパン・ブリッジ・スカンジナビア 会長)	
ジャパン・ブリッジ・スカンジナビア ～日本とスウェーデン、両国の発展のために～	5
SCFレポート①	
「Swea Fest 北海道 “Kräftskiva”」	8
寄稿：トーマス・ヴェデルス (ジャーナリスト)	
「東京から稚内まで歩いてみた」	12
SCFレポート②	
「ブンネ楽器体験イベント」	17
寄稿：ソフィア・ヤンベリ (元SCFスタッフ)	
ソフィア・ヤンベリの「スウェーデン便り」	18



SCF 書籍紹介コーナー

インタープリターズガイドブック

－意味の探求を促すガイドの技術



著：ジム・ブックホルツ、ブレンダー・ラッキー
マイケル・グロス、ロン・ジーマーマン
訳：山本風音 監訳：山本幹彦

発行：合同会社ラーニングアウトドア
発売日：2023年8月
ページ数：352頁
価格：3,080円(税込)

「人がどこかを訪れたり、何かのプログラムに参加したりするとき、その人は単なる知識や情報ではなく、より本質的な“自分にとっての意味”を求めている——。」1994年に出版された『インタープリテーション入門——自然解説技術ハンドブック』（日本環境教育フォーラム監訳、小学館）の大幅改訂版。自然や文化を解説し、人に伝える「インタープリター」という仕事について、アメリカの国立公園を中心とした実践や考え方がまとめられています。知識や情報を一方的に伝えるのではなく、“意味のある”コミュニケーションを生み出すにはどうすればいいのか、「人に伝える」ことの基本的なアイデアが詰まっています。

中西印刷さん広告

ジャパン・ブリッジ・スカンジナビアは、日本とスウェーデンをはじめとするスカンジナビア諸国との社会・文化・経済の交流を促進することを目的に2021年4月に設立された非営利かつ政治的にも独立した団体です。日本とスウェーデン両国の人や組織どうしのネットワークを作るだけでなく、相互理解や両国に共通する課題・目標を達成するための機会を設けることが私たちの活動です。



JAPAN 橋 BRIDGE SCAND/NAVIA

ジャパン・ブリッジ・スカンジナビア
～日本とスウェーデン、両国の発展のために～

寄稿

ジャパン・ブリッジ・スカンジナビア

会長 オフェリア・マッセン

私たちは、日本とEUの間で締結されたJSEPA (Economic Partnership Agreement) “経済連携協定”、SPA (Strategic Partnership Agreement “戦略的パートナーシップ協定”)、そしてグリーン・アライアンス (環境を保護し、気候変動を阻止するとともに、グリーン成長を実現するための協定)のもと、日本とスカンジナビア諸国をはじめとするEUとをつなぐ「ハブ」としての南部スウェーデンのさらなる発展のために、前身となるジャパン・ハウス・スカンジナビアを設立しました。私たちが拠点を置く南部スウェーデンは、主要都市であるマルメと Lund およびその周辺地域を含めると400万の人口規模となり、日本からの北欧諸国をはじめとするEU各地への玄関口となっているデンマークのコペンハーゲン空港とはオーレスン・リンク (スカンジナビア半島とデンマークの間にあるオーレスン海峡を結ぶ橋) でつながっているためアクセスも良く、また北欧諸国はGDPで韓国やカナダと同程度の経済規模を誇ることから、社会・経済・文化の交流に良い条件を備えていると言えるでしょう。



Joint Innovation “協働イノベーション”



先日公開された2つのイノベーション・レポート（リンク先参照）では、スウェーデンはEU域内で最も革新的、世界でも3番目に革新的な国であると言われています。私たちの国はこれまでテトラパック社やスポティファイなどに代表される多くのイノベーションと、その世界的な技術革新や創造活動に対して毎年その栄誉を称えるノーベル賞という輝かしい遺産をもっています。1949年に湯川秀樹氏がこの賞を受賞して70年余りの間に、29人も日本人がこの賞を受賞されました。2017年に文学賞を受賞されたカズオ・イシグロ氏の名前は記憶に新しいものではないでしょうか。加えて、スウェーデンのシンクタンクである“Intelligence Watch”が、日本

とスカンジナビア諸国の既存のビジネスや政治的な結びつきについて記したレポート、北欧のサステナブル・テック・バナナから日本への招待状[※]では、日本に向けてカリフォルニアのシリコンバレーと比べて、よりサステナブルな、ヨーロッパのシリコンバレー、との協業の重要性や、スカンジナビア諸国に向けては、最も革新的な国であり、アジア諸国の中でも重要で戦略的なパートナーである日本との協業の重要性を説いています。このレポートは Intelligence Watch の日本パートナーである OSINTech によって日本語に訳され、日本語と英語どちらでもダウンロードし読むことができます。

Nodepole イノベーション・レポート (QRコード参照)

※英語で書かれています



10月には、マルメ市の代表団が日本の企業とスウェーデンのスタートアップ企業によるイノベーションの可能性を模索するために日本を訪れ、北海道にも足を運びました。マルメ市は先進的な取り組みをおこなう日本の企業と北欧の企業が共同でビジネスや技術開発に取り組むための「ハブ」となるべく活動をしていきます。また、国際協力の必要性がより一層増してきていることから、企業に技術革新を促している北海道の取り組みに対して魅力ある提案をしていきます。

今回マルメ市の代表団の代表として、また[※]STRING Megaregion の代表として、ジャパン・ブリッジ・スカンジナビアのメンバーでもあるマルメ市のビジネス・渉外部局長であるミカエル・ノードが秋元克広札幌市長と土屋俊亮北海道副知事のもとを表敬訪問し、今後のさらなる協力関係について話し合いました。また、北海道と北欧のスタートアップ企業との連携促進に取り組む企業「KEUCHI LAB」にも訪問しました。



Intelligence Watch レポート

“北欧のサステナブル・テック・バナナから日本への招待状”

日本とスウェーデンのビジネスと研究の分野における結びつきは非常に強固なもので、とりわけ「老化」「物質科学」「サステナビリティ」そして「人工知能」という分野は、日本とスウェーデンの大学による共同研究プロジェクト「MIRA2.0」でも両国の共通の研究トピックとして取り上げられています。私たちは、ジャパン・ブリッジ・スカンジナビアは、重要な経済市場であり、研究、文化交流の相手でもある日本の発展に寄与していきたいと考えています。そしてその関係は経済の分野にとどまらず、日本とスカンジナビア、ひいてはEU全体が近い間柄であること示すために、ジャパン・ブリッジ・スカンジナビアは、日本とヨーロッパの「架け橋」となり、スウェーデン大使館のような、日本にあるスウェーデン／スカンジナビアの友好に尽力していきたいと思っています。

※ STRING Megaregion : スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、ドイツの北ヨーロッパ4カ国、7都市8地域にまたがって展開している、イノベーション／グリーンテクノロジーの分野における合計20ヵ所の企業・団体から成る団体。

Membership and Friends “メンバーシップ&フレンド会員”



ジャパン・ブリッジ・スカンジナビアでは、日本とスウェーデン、両国をはじめとして私たちの活動に共感し、共に歩んで下さる企業、団体を広く募集しています。ジャパン・ブリッジ・スカンジナビアのメンバーになることによって、日本とスカンジナビア諸国に関わる企業、団体、行政機関関係者や研究機関と言った幅広い分野の関係者たちと、より深いつながりを構築することができます。それはメンバーの方がそれぞれの組織において下さる意思決定に必要な視点を、必ず

や有意義なものとするものでしょう。また、社会、経済、文化のそれぞれの分野で深い洞察を得られる有益なセミナーへの参加機会をご提供いたします。

また、私たちの活動に賛同していただける個人の皆様に向けては、フレンド会員、となることをご提案しています。私たちジャパン・ブリッジ・スカンジナビアについての最近情報をお伝えするニュースレターだけでなく、私たちが関わるセミナーやウェビナーへの招待状をお送りいたします。メンバーシップやフレンド会員となることをご検討されている方や、私たちジャパン・ブリッジ・スカンジナビアについてもっと知りたいという方は、私たちのホームページをぜひご覧ください。

ジャパン・ブリッジ・スカンジナビア
ホームページ



The board of Japan Bridge Scandinavia ～ジャパン・ブリッジ・スカンジナビア理事会メンバー～



会長
オフエリア・マッセン
Ofelia Madsen



副会長
ミカエル・パルムクイスト
Mikael Palmquist



セロルド・アンダーソン
Cerold Andersson



ラーシュ・ヴァリエ
Lars Vargö



ミカエル・ノード
Micael Nord



テレーズ・フェルマン
Therese Fällman



アンダース・オルスホーフ
Anders Olshov



ヴィクトル・エーヴァル
Victor Öwall



レベッカ・レテヴァル
Rebecka Lettevall



モニカ・リリーエンクイスト
Monika Liljenqvist

SCF REPORT

Swea Fest

スウェーデン祭り
Swedish party



September 2,
2023

KRÄFTSKIVA at Sweden Hills

ザリガニの下ごしらえにはビールもつか
いました。



9月2日(土)、SCFとしては実
に4年ぶりとなる「ザリガニパー
ティ」を開催しました。

今回は東京・江東区大島にある
スウェーデンカフェ「オーテル・
トウキョウ」さんにご協力いただ
き、本格的なスウェーデン料理を
楽しんでいただきました。



オーテル・トウ
キョウのシェフ
のジミーさん。

当日は後志からいろいろしやつた方も



北欧のカフェ “ÅTER Tokyo”

オーテル・トウキョウ

東京・江東区大島の旧中川・
川の駅にある北欧カフェ。
本格的な北欧スイーツや軽
食が食べられるほか、自家
焙煎珈琲もおすすめ。定期
的にコンサートも開催して
います。



ホームページはこちらから！

ザリガニパーティ
終了後に
みんなで。



SCF 書籍紹介コーナー



シッカとマルガレータ 戦争の国からきたきょうだい



作／ウルフ・スタルク
絵／ステイーナ・ヴィルセン
訳／きただい えりこ

出版社：子どもの未来社
発売日：2023年5月10日
仕様：AB変、上製、42頁
価格：1,700円＋税
ISBN：978-4-86412-234-4

戦争を逃れ、家族と離れて平和な国へひとり旅立つシッカ。むかえる家族にはマルガレータという同じ年頃の女の子がいて、ふたりは反発しあうも、次第にここを通わせていくが……。戦争が引き起こす問題を伝えるスウェーデンの絵本。

訳者：きただい えりこさんより



イラストを担当された
ステイーナ・ヴィルセンさん

この夏、スウェーデンのストックホルムで、絵本のイラストを担当されたステイーナ・ヴィルセンさんにお会いしました。

絵本の背景にあるのは、第二次世界大戦下、フィンランドから多くの子どもたちがスウェーデンへと疎開してきた事実です。まだ幼かったステイーナさんの母親も、近所にそのような疎開児童がいて、よく一緒に遊んだそうです。ステイーナさんは今回、絵本のイラストを描くにあたり、母親から当時のようすを聞いて参考にしたそうです。登場人物の服装や家具はみな、母親の記憶をもとに細部までこだわって描かれ、当時の姿をていねいに、私たちに伝えてくれています。

当時を知る手がかりは、ストックホルムの町なかにも見つけることができます。疎開児童を乗せた船が到着としたという港の近くには、7万人もの子どもたちがフィンランドから逃れてきたことを伝える記念のレリーフがひっそりと飾られていました。

絵本のなかでは、マルガレータのお父さんとお母さんが、新聞で疎開児童についての記事を読み、シッカを引き取ることにします。しかし、なかには、引き取り手の見つからない子や、引き取られた先の家族とうまくいかなくなってしまった子もいました。幸いにもストックホルムには、古くからスウェーデンとフィンランドとの交流に尽力してきた、フィンランド教会があり、そうした子たちの受け入れ先を探す役割を担ったそうです。

戦争が終わると、多くの子どもたちがフィンランドへと帰りましたが、スウェーデンで暮らしているうちにフィンランド語を忘れてしまい、家族と意思の疎通ができずに、再びスウェーデンへ戻らざるを得なくなってしまった子たちもいました。こうした教訓もあってか、スウェーデンでは現在、外国ルーツの子どもたちの母国語教育に、とても力を入れています。フィンランド教会でも今日、未就学児向けに、フィンランド語の教育の場を提供しています。

もちろん、言葉が通じなくても、共通する部分や分かり合える部分はありますし、反対に、同じ言葉を使っても、相手を傷つけてしまうこともあります。大切なのは、相手を尊重し、理解しようとする気持ちを持つことではないでしょうか。そうした気持ちを持つことで、言葉の理解も進むように思います。そう、まさにシッカとマルガレータのように。



GOTT NYTT ÅR!

謹んで新年のお慶びを申し上げます

旧年中は当財団の事業運営に格別のご支援を賜り、心より御礼申し上げます。
本年も旧年に変わりませず、一層のご厚誼、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。



当財団は、2023年3月で設立40周年を迎えました。また昨年、スウェーデンと北海道の新たな交流の幕開けとして、札幌市にスウェーデン名誉領事館が開設されました。スウェーデンと北海道の繋がりがより深く、その交流が盛んになることを願い、これからもみなさまとともに日本とスウェーデンの経済的・文化的交流を推進し、北海道の産業・文化の発展に寄与してまいります。

末筆ながら、みなさまご家族の方々のご健康とご多幸を祈念して、新年のご挨拶といたします。

一般財団法人スウェーデン交流センター 理事長 村井秀壽

私達はスウェーデン交流センターに協賛しています

アートルフ工業株式会社	旭川スウェーデン協会	株式会社 飯田工務店	池下紙業 株式会社	株式会社 石川建設	伊藤組土建株式会社	遠州紙工業株式会社	越智建設株式会社
株式会社 関東トウウン	株式会社 クロスト	ケイヒン株式会社	KEN SOGOSETUBI 有限会社 憲 総合設備	小西工業株式会社	株式会社 小林住工	西條産業株式会社	株式会社 札幌トウウン
社会保険労務士法人 札幌労務管理	株式会社 サン・クリーク	株式会社 椎谷建設	清水ダンボール株式会社	株式会社 新晃建設	Sweden House 40th ANNIVERSARY	株式会社 スウェーデンハウスリフォーム	Sweden Hills Golf Club since 1975 スウェーデンヒルズゴルフ倶楽部
仙台紙器工業株式会社	大一コンテナ株式会社	大栄建工株式会社	タイヨー株式会社	有限会社 たきお水道	株式会社 玉巻	株式会社 ダンネツ	
辻野建設工業株式会社	当別町	当別町商工会	当別・レクサンド都市交流協会	Rotary 当別 ロータリークラブ	株式会社 トウウン	株式会社 トウンパッケージ	株式会社 トーモク
株式会社 十勝パッケージ		株式会社 中川	有限会社 長島設備商会	NAKANISHI PRINTING CO., LTD. 中西印刷株式会社	株式会社 長嶺設備工業	NTI 日本東海インダストリアルペーパーサプライ株式会社	
有限会社 蜂谷建設	株式会社 馬場電気工業株式会社	Fuji Home Energy 富士ホームエナジー株式会社	株式会社 プライムトラス	プレスト株式会社	株式会社 ベルデア	北新マテリアル株式会社	株式会社 北洋交易
株式会社 ホクヨー	株式会社 北海運輸株式会社 Hokkai Transportation Co., Ltd.	公益社団法人 北海道国際交流・協力総合センター HIECC / ハイエック		北海道スウェーデン協会	株式会社 北海道ニッタン サービスセンター	株式会社 ホリカワ	株式会社 美樹工業株式会社 MIKI KOGYO CO., LTD.
株式会社 宮永建設株式会社	メークス株式会社	株式会社 森川総合紙器株式会社	森永エンジニアリング株式会社	ヤクシン開発株式会社	株式会社 ワコー		

「東京から稚内まで

歩いてみた」

ジャーナリスト

トーマス・ヴェデルス
Thomas Wedérus

私

が日本という国に初めて興味を抱いたのは子どもの頃のことです。父が出張で東京に行った際にお土産として茶色と黒、二振りの日本刀を持ち帰ってきました。父はその茶色のものを姉に、黒色のものを兄に与えました。当時の私は幼すぎて、日本刀を手にするにはまだ早すぎたようですが、その二振りの日本刀からは今もお深い感銘を受けているのです。

そんな父が出張で訪れたはるか遠くの、しかしながら美しく見事なものにあふれる異国の地に私は幼いころから興味を抱き、魅了されていたのです。

高校を卒業した19歳の頃、その頃にはその二振りの日本刀の持ち主だった私の姉兄は日本刀への情熱をそれほど持ち合わせていなかったこともあって、二振りとも私が譲り受けていたのですが、幼いころから憧れを抱いていた日本を訪れることが私にとっての一番の夢になっていました。仕事で貯めたお金と資金援助をしてもらい、ほどなくしてその夢をかなえることができました。

初

初めての日本は一人旅で、一人で見知らぬ土地に降り立ち、そこに住まう人は皆会ったことはなく、話し

たことのない言語と知らない文化に触れる。当時の自分にとっては、それだけでも大きな挑戦であったと感じています。

およそ一ヶ月の間東京にほど近い千葉県柏市の日本人夫婦の家の一部屋を間借りし、ほぼ毎日寿司を食べ、日々大都市東京の規模と人の多さに圧倒されていたことを今でもはっきり覚えています。

そ

んな日本への初旅行の後、再度日本への訪問が叶ったのは7年後のことです。日本の自然と食を堪能し、私も迎え入れてくれた夫婦にも会うこともでき、日本語についてより深く学ぶ機会にも恵まれました。そんな体験を通し、日本に来るほどに自分の家のように感じられるようになったと同時に、より大きな冒険を試みたいとも思うようになりました。現在に至るまで、私の日本滞在は毎回概ね1ヶ月程度ではあるのですが、より長い期間日本で過ごし、大都市や有名な観光地を見て回るだけでない、私らしいやり方でこの素晴らしい国を知りたい、と。



か

くして、今回の日本各地を歩いて回るというアイデアが生まれました。バック旅行のようなあらかじめ決められたルートを辿るのではなく、私自身が行きたいと思う道を選んでルートを決めて「歩いていく」というものです。その計画が実際に実現できる段階になったのは数年前のことで、新型コロナウイルスによるパンデミックで実現までに時間を要したものの、今年ようやくその計画を実行に移すことができました。

4月26日、私はナップサックに服を詰め、今回のスタートとゴールである東京から日本最北の地である北海道の稚内までの行程案を考えながら日本に向けて出発しました。ゴールまでのルートについてあらかじめ勉強したわけではなく、どのルートを進むのが良いか…太平洋側に出て北に行くべきか内陸の道を進むべきか、どれくらい時間がかかるのか、どんな障害や事態に直面するのかなどというところから、歩き始めた時には分かっていなかったのです。今回の計画の根底にあるものは、その時その場所に立って現在の状況を把握・理解し、それによって進むべきルートを選択することなのです。その時その瞬間を生きて、ありのままを受け止めるということを体現したとお考え

ください。私は現在フリーランスのジャーナリストとして活動しており、仕事もリモートでおこなっているため、今回のこの旅行の資金もこの旅行中に稼ぎ、調達していました。ノートパソコン1台とカメラ1台、これで私はスウェーデンの新聞社に旅行中のできごとを記事として送り、原稿料をもらっていたのです。

ほ

どなくして、今回の旅の中で、それこそ道標となる機会を得ることになりました。北海道・当別町スウェーデンヒルズで行われる夏至祭へ招待されたのです。スウェーデンヒルズとは5年前の2018年に行われたハーフマラソン「当別スウェーデンマラソン」に招待されて参加したという縁があったのですが、3ヶ月とい

う今回私のビザで滞在できる期間を考慮したときに、北海道の当別町で夏至祭が行われるタイミングは「この時までにはスウェーデンヒルズに歩いて行かなければならない」という、良い意味での制約になり得たのです。

それによって、寄り道をしすぎず、一つの場所に居過ぎない意識して歩き続けることができました。ちょうど日本は梅雨の時期でもあったので、イメージ通りに歩を進めることが出来ず、立ち往生を余儀なくされたことや、魅力的なルートが近くにありながらも、スケジュールを鑑みると最短ルートを選ばなければならなかったというジレンマもたくさん経験しましたが。



旅

自体は非常に快適なものでした。日ごとのルートはその日歩くルートから適当な位置にホテルがあることを基本として選び、概ね一日15km程度（最長で35km程度）歩くことになっていましたが、今回歩いたどのルートも、常にコンビニやレストラン、自動販売機があり、水や食料の心配をする必要がなかったということはとても大きな要因でした（ほとんどのホテルにコインランドリーがあったことも大きな助けになりましたね）。

中

継地点となるスウェーデンヒルズまでの道中では多くのできごとを経験しました。

東京を出発してほどなく、茨城県つくば市に着いた際、ちょうど日本はゴールデンウィークの真っただ中だったことも





あり、道中に宿泊を考えていたホテルがすべて満室で、予定のスケジュールよりも長く立ち往生することになりました。

同じく茨城県の磯原町では、利用したホテルで友人になったドイツ人旅行者と太平洋の眺めを楽しむことができませんでした。また、福島第一原子力発電所の近くにある富岡町に立ち寄った際には、海外でも関心を集めていた東京電力の原子炉冷却に使われた処理水を巡る論争についての記事を書き、富岡町長や住民、原子力発電の専門家にもインタビューをおこないました。

仙台では人生で初めてとなる野球観戦をし、東北楽天ゴールデンイーグルスと

北海道日本ハムファイターズの試合を見ることができました。盛岡では小さなバーでスウェーデンのナショナルデー（1523年グスタフ・ヴァーサーがスウェーデン国王に即位しスウェーデンがカルマル同盟から独立した日、また1809年スウェーデン憲法が制定された日です）のお祝いをした際に、二人の日本人と一緒に祝ってくれて、友達になることができました。



本州で最後に訪れた八戸では、郊外の森の中を歩いていた際に、初めてカモシカにも出会いました。突然目の前に現れ、一瞬立ち止まって私の方を見たかと思っただけで森の中に消えていきました。とても不思議な、神秘的なひと時でした。

北

北海道へはさすがに歩いて渡ることはできないので、八戸からフェリーで苫小牧に渡り、夏至祭が行われるスウェーデンヒルズを指すことにしました。この時点で既に夏至祭の数日前だったこともあり、招待されているにも関わらず間に合わなかったというのでは招待してくださった皆さんに申し訳ないので、今回唯一の例外として札幌までは電車で移動し、札幌から当別までは歩いて移動することにしました。

ここまで日本の至る所を歩いて回り、色々な日本を間の当たりにしてきましたが、日本の中でスウェーデンを思い出させるスウェーデンヒルズの風景を間にあたりになると、やはり不思議な感じがするものです。スウェーデンヒルズの中にあるゲストハウスに泊めてもらった際にはスウェーデンの家に帰った気になり、スウェーデンヒルズの夏至祭でも家に帰ったような気がしたのです。マイストングも全く同じで、立て方も衣装も音楽も同じ。おまけに雨模様と天気までスウェーデンの夏至祭と同じとなれば、スウェーデン人としては何とも言えない、とても妙な感覚を覚えます。



夏

至祭では、祭に参加した方に今回の旅についてお話する機会を作ってもらいました。参加して下さった方は皆私の話を興味深く聞いてくださり、その後隣の公園で開催されたスウェーデンのゲーム「クツブ」にも一緒に参加してくれるなど、みなさんとても親切にしてくださいました。今回の旅の中でも、とても思い出深いエピソードです。

札幌では現地のラジオ番組へ出演して今回の旅についてお話しするなどして数日間滞在しました。その後本題である稚内に向けての旅を再開させたわけですが、ここから先は本州と比べ、旅が大変なものになることを実感することとなりました。夏至祭をはじめ北海道で出会った皆さんは、皆一様に熊に気をつけること、本州と違って北海道はホテルの数が少なく、また離れていること、北に行けば行くほどコンビニや自動販売機がとてもなくなくなっていくことなど、北海道ならではの事情を教えてくださいました。水や食料の準備や長距離を歩くための準備は欠かせないことを感じた瞬間でした。



北

北海道の旅は本当に大変で、本州での移動はこのための移動距離は長く、ホテルの数も限られているためあらかじめ予約を取っておき、間に合うように移動することも必要となりました。そのために当初予定していたルートを外れて近道のために山や畑の中を歩く必要もありました（最初の予定では札幌からまっすぐ北に向かって、海岸に沿って稚内まで向かえばよいと思っておりましたが、道中ホテルや宿泊できる場所が本道に限られることから、旭川に向かい、そこから北を目指すルートに変更することを余儀なくされました）。

また、道中何度も「熊注意！」という標識を目にすることがありました。これで別のルートを選択することもありませんでしたが、こんな経験もスウェーデンでは得られない、とても貴重な出来事でした。今回の道中、幸いなことに熊に出くわすことはありませんでしたが、ヘビや鹿、キタキツネに会う機会に多く恵まれました。こういう所はスウェーデンに似通っていますね。ただ、スウェーデンにも鹿やキツネは生息しているのですが、北海道ほどに沢山見ることはないです。さすがに一日に20頭以上も野生の鹿を見るとは思いませんでした！



ス

ターゲットしてから73日目、漸く旅の目的地である稚内に辿り着きました。ここまで約1200kmの道のりを歩いてきたことは、言葉では言い表すことのできない気持ちです。安心感と誇らしい気持ち、でも同時にこれだけのことを達成したという実感がないという気持ちもありました。ゴールしてみると今回の旅はあつという間のことであつたような気がするのです。もうじき終わってしまう、もうじきゴールが見える、そんな感慨に浸りつつ、利尻島に数日立ち寄り、77日目にしてゴールである日本最北端の宗谷岬に辿り着くことができました。



幾

分早くゴールできたことで、残り時間が新聞記事の執筆に充てることになりました。今回の旅でルートになつていなかった帯広に電車で向かい、かねてからこの目で見てみたいと思っていた蛸を初めて見、その感動を新聞の記事にすることにしました。また、ロシアが実効支配している北方領土についての記事を執筆するために根室に足を運び、その後東京に戻った私は、日本の大学無償化の方策についての記事にも取り掛かりました。

旅

を終えてスウェーデンに戻った時、家に戻ったという安心感や幸せ、慣れ親しんだものに触れることに嬉しさを覚えたと同時に、日本に戻りたいという気持ちが早くも沸き起こっていることを感じました。自分の家であるかのような感じすら覚え、もつとたくさんの街や大自然を巡るために北海道に戻りたいと。そしてまた、時間はかかるかも知れませんが今回達成できなかった日本のもう半分…東京から鹿児島、沖縄にも行かなければという使命感も感じているのです。

ひとつ確かなこととして言えるのは、父が二振りの日本刀を家に持ち帰った時から、日本と言う国は私の一部となっており、今もなお私の人生の一部分でもある、ということなのです。

寄稿者紹介

トーマス・ヴェデルス Thomas Wedérus

1985年 ストックホルム郊外のヴェステロース生まれ。2010年にストックホルムに移り、大学院で心理学を学ぶ。2020年よりジャーナリストとして活動しており、現在はヨーロッパ・バルカン半島情勢をはじめとして世界各地を渡って新聞記事を執筆している。また、今回旅した日本での経験を書籍として出版する予定。





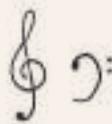
「誰でも気軽に音楽を楽しめるように」

そんな願いのもと、スウェーデンの音楽療法士と工業デザイナーによって作られた楽器があります。それが“ブンネ楽器”と呼ばれる4種類の楽器です。

SCFでは、2019年にオンラインコンサート「SCF Hemkonsert」で初めてブンネ楽器を紹介してから、月一回のブンネサークルをセンターホールで開催するなど、この楽器の魅力を伝える活動に取り組んできました。

そんな中、昨年10月にはブンネ楽器の制作に携わった「Bunne Music AB」代表のアンデシュ・モス氏、そのご子息のアクセル・モス氏、そして日本でブンネ楽器普及に尽力されている国際ケアシステム株式会社代表のグスタフ・ストランドル氏の三名をお招きして、北海道の方にブンネ楽器を体験していただくイベントを開催しました。

~私って、いいね~



ブンネ楽器 体験イベント

スウェーデン発の
インクルーシブ楽器



2023
Oct/4~7



札幌の講演では、グスタフさんの指揮でみなさんすぐに楽器が弾けるようになりました



ブンネ楽器だけでなく、スウェーデンの福祉制度についてもお話いただきました



西当別小学校でも体験授業をおこないました



左からアクセルさん、アンデシュさん、グスタフさん

“ブンネ楽器”

スウェーデンの音楽療法士ステン・ブンネ氏が考案し、工業デザイナーのアンデシュ・モス氏と共同で制作した楽器です。演奏するための技術や楽譜を読む知識がなくても音楽を楽しめるように設計されており、現在スウィングバーギター、ミニベース、チャイムバー、単音フルートの4種類があります。

SCFでは、誰でも楽器に触れて演奏していただけるように、ブンネ楽器のうちの一つ「スウィングバーギター」を展示しております。他の楽器に触ったみたい、または購入したいというご相談も承りますので、お気軽にお問い合わせください。

SCF ブンネイベントはこちら！



スウィングバーギター



ミニベース



チャイムバー



単音フルート



ソフィア・ヤンベリ

スウェーデン便り

Brevet
från Sverige
by
Sofia Jernberg

Femte
第5回

皆さん、こんにちは！ソフィア・ヤンベリです。

9月になって、涼しい秋の風が戻ってきています。夏より秋の好きな私にとって、それは素晴らしいことです。夏にも素敵なところもちろんありますが、紅葉とセーターの季節を楽しみにしています。

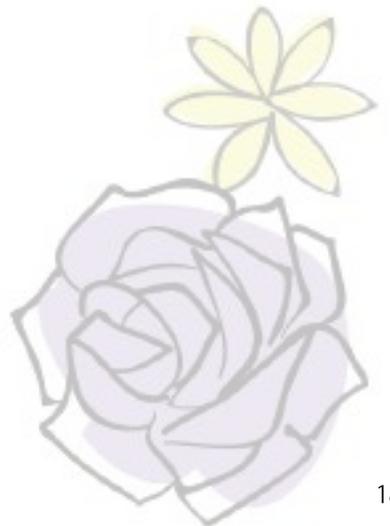
スウェーデンの今年の夏の始まりはとて暑かったのですが、多くのスウェーデン人にとっては、夏休みになる7月はずっと雨で、20度を超える日が少なかったです。暖かい陽気のなかでそれぞれの趣味や遊びを楽しみにしていたスウェーデン人にとって、悔しいことでした。みんな、結構がっかりしていたのです。

しかし、涼しいというだけで外の遊びをあきらめてしまうのはスウェーデン人っぽくないので、雨模様であってもスウェーデン人は夏を楽しんだのです。

今年の夏は新しい流行りが色々ありました。私もはまったのが、SUP (Stand Up Paddleboard) でした。SUP は立ちながら乗る、サーフィンボードとカヌーの混ざったようなボードのことです。特にストックホルム周辺は池や湖がたくさんあるので、SUP を使って色々なところへ行けます。ボードから立って見る景色は普段と違って、とてもきれいでした。

8月に家族と一緒に、ダーラナ地方にある我が家のサマーハウスの近くの Tofan

という湖でSUPに乗ってみました。小さな湖や海ではちょっとだけ乗ったことがあったのですが、今回は初めて遠い距離に挑戦してみました。風のない日を選んで、トータル3・5キロメートルぐらい。終わったら、足も腕も大変疲れていたので、非常にきれいな景色をみることができましたし、エンジンがないので、静かな中で自然を満喫しました。





多くのスウェーデン人は夏休み中、スペインなど暖かい国を選んで海外に行きます。今年は7、8月も例年ほど暑くなかったこと、スペインへの飛行機代がかなり安かったこともあって、チャンスのある人はやっぱり行きました。四季があるのがとても素晴らしいことだと思うので、夏が夏らしくないとやっぱり残念です。夏が暑いからこそ長くて暗い冬を乗り越えられると思っているので、スウェーデンで暑い夏を経験できないとやっぱりちょっと逃げたくなるんですよ…。

私は今年の7月と8月の半分以上は休みがなかったもので、ずっとストレスを溜めながら仕事をしていました。みんなサマーハウスやスペインに行っていたので、街中は人も車も少ないから毎日の通勤が速かったことに対してはありがたかったですけどね。

まあ、今年の夏はあまり良い天気ではなかったかもしれませんが、なぜか9月に入ってからはとても素敵な天気が続きました。毎日晴れていて、温度も気分の良い20度を少し超えた温度で、過ごしやすい日々が続きました。夏が不思議なくらい寒

かったこともあると思いますが、今年は9月になってから森も公園も人でいっぱいです！雨がたくさん降ったおかげで、スウェーデン人の大好きな森の「金」がたくさん現れてきました。何かって？それはキノコです！

スウェーデン人の多くはキノコが大好きで、森に入ってからキノコを探すのが多くのスウェーデン人の秋の定番です！家族身内であつても誰にも教えない秘密にしているキノコの場所があつても珍しくないくらいです。この時期スウェーデン人の「Foodbook」を見れば、キノコの写真ばかりです（ちなみに私はと言うと、実は毒キノコと食べられるキノコを間違えて食べてしまうのがとても怖いので、私はやっぱりスーパーで買って食べます…）。

秋はリンゴ、梨とプラムを採る時期でもあるので、果物がおいしい時期ですよ。秋はスウェーデンでもまさに収穫の時期で、母も庭に植えたきゅうりをたくさんとって、漬物をたくさん作っています。9月に獲れた分だけで、きゅうりの漬物を年が明けるまで食べられると思います。

Author・・・ソフィア・ヤンベリ Sofia Jernberg



1993年ストックホルム生まれ。ストックホルム大学日本研究学科在学中の2013年に初来日。南山大学に留学後、帰国してストックホルム大学を卒業。2016～17年上智大学に留学。2018年～19年スウェーデン交流センター（北海道当別町）に勤務。現在、スウェーデンの特許法律事務所勤務。『ぼくが小さなプライド・パレード 北欧スウェーデンのLGBT+』の著者。



日本にあるスウェーデン



ウエスト地区好評分譲中！

札幌市街、
石狩湾を望む
街区です。

■今回販売敷地面積：468.87 m² (1区画)～872.30 m² (1区画)

■今回販売価格：1,418.3万円 (1区画)～2,506.8万円 (1区画)

■今回販売区画数：5区画

〈売主・事業主体〉国土交通大臣許可(特-4)第13225号/国土交通大臣免許(8)第4255号
(公社)全国宅地建物取引業保証協会会員 (公社)東京都宅地建物取引業協会会員 (公社)首都圏不動産公正取引協議会加盟



株式会社スウェーデンハウス

本社 東京都世田谷区太子堂4丁目1番1号 〒154-0004 TEL03-5430-7620 (代表)

スウェーデン交流センター広報誌「ビョルク」

発行日：2024年(令和6年)1月1日

発行：一般財団法人スウェーデン交流センター
デザイン監修/協力：株式会社スウェーデンハウス

賛助会員募集中！

SCF主催のイベントやSCFガラス工芸
工房のガラス作品を優待価格にてご
案内いたします。

詳しくは右のQRコードよりSCFホーム
ページをご覧ください。

